

# 仙台教区報

戦後50年を迎えて

## 平和の実現は私たちの願い

今年の日本カトリック平和旬間（8月6日～15日）は戦後50周年を記念して、日本全国、各教会で祈りの集いや記念行事が開催されている。

仙台教区では司牧評議会が中心になって平和の実現を願う行動を検討し、「ゆるしと平和を求めるミサ」（略称・平和ミサ）を捧げることを決めた。平和ミサは仙台・正義と平和協議会の協力を得て検討され、既に教区内各地で実施されている。

このミサは全小教区で捧げることが柱になっているが、それとは別にカテドラルでは教区主催の司教ミサが8月13日午後4時から行なわれた。ミサは信徒以外にも呼びかけが行なわれ、教区の平和ミサを集約するものとして捧げられた。

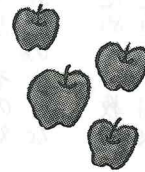
教区の平和ミサは、日本カトリック司教団教書『平和への決意』に触発されて計画されたものである。司教団は教書発表にあ

カトリック仙台司教区本部事務局  
〒980

仙台市青葉区本町1丁目2番12号

☎ 022(222)7371  
FAX 022(222)7378

編集・発行 板垣 勤



たり、カトリック教会が平和の実現に向けて全力を尽くすこと、全教会が一致して新たに歩むとの決意を公表している。

このため、教区では小教区で平和ミサを捧げる前に、信徒が教書の全文に再度目を通すように呼びかけた。

多くの人が出席して捧げられた平和ミサは、はじめに趣旨説明があり、平和ミサのための教区共通の回心の祈りと3つの祈願文が用いて捧げられた。

### 歴史を振り返り、学ぼう

ところで、信徒の中にはカトリック教会が戦後の50年間を振り返って、アジアなどの諸国に戦争中の行為のゆるしを求める意味を計りかねると感じている人が見受けられる。

これについて司教団教書は、日本が戦争

中に主権国家として主にアジア諸国の兄弟姉妹に何をしたかを最初に述べ、特に戦争中に日本のカトリック教会が、戦いの中で行なわれている残虐行為などを知らないかのように過ごし、今に至るまで国も教会もそれらの事実に関心なままに過ごしてきたことに気付くよう訴えている。

それは当時のカトリック教会が尊い人命を守るために、神のみ心にそって果たさなければならぬ預言者的な役割を適切に認識せず、非人間的・非福音的な時の流れに押し流されたと表現されている。

私たちは戦時中のカトリック教会の歩みを振り返るとき、特殊な時代背景があったことを否定はしない。しかし、カトリック教会が福音を述べ伝える使命に反する決定と行動をしたことを忘れてはならない。なかでも、戦争を賛美し侵略と認められる軍事行動を、カトリック教会が積極的に擁護したことは明らかな誤りであった。

戦争はいつの時代にも複雑な要因が絡み合っを行なわれ、加害者と被害者を単純に色分けすることが難しい。しかし、戦争が悪であり、多くの悪を引き起こして人々を苦しめる事実には変わりがない。この故に教書は、信徒一人ひとりが平和の決意を行動で表わすために、実際にあった事実に向き、反省したうえで平和に向かう行動に移るよう強く呼びかけている。

戦後50年目に生きる私たちは、戦争中に

起こった事実を直視し、現代人として今果たすべき責任を知り正しい判断に基づいて行動するよう、神と世界から期待されているのである。

平和ミサは日本とカトリック教会が犯した誤ちの弁明ではなく、アジアなどの諸国の兄弟姉妹に重い苦しみや痛みを与えたことのゆるしを求め、傷を受けた者どうしの癒しの恵みを神に求めて祈る時であったことを忘れないようにしたい。

私たちは戦争によって、他人には知りようが無い苦しみを背負わされた人がたくさんいることを思い、可能な限り戦争被害者への償いに努めるようにしたい。

教区の四県には信徒によって「カトリック戦後50年を考える会」が作られ、平和を求める行動の一つとして四教会（郡山・元寺小路・八戸塩町・四ツ家）で小田武彦神父による講演学習会が開催された。

### ■ 司牧評議会報告 ■



3月の定例会議の報告です。

(1) 司牧評議会規則と各県信徒連絡協議会の見直し

司牧評議会役員会は以前から、教区の現状を見て司牧評議会の活性化と、基本的な方向づけを明らかにしたいとの意向を持つ

ていた。それで、現評議員の任期が9月に終了する前に懸案事項をまとめることを考慮した議案が提出された。

審議の結果、司牧評議会規則は評議員と役員との構成を見直して評議員を削減すること、各県信徒代表を選出派遣する組織の名称を共通した名称「カトリック〇〇県連絡協議会」とすることが決まった。

これにより、評議員の選出母体と選出方法が今までより明確になり、各会、各県からの意見が反映されやすくなるものと期待される。

新規則にもとづいて選出される司牧評議員は9月23日の定例会議から動きだす。

(2) 「教会施設整備共済基金」設立検討委員会の設置

教区では老朽化などによって、各種の教会施設等の改修をせまられている小教区が増えている。これは教区の今後と、その対応策、資金の手当を考えると教区の大きな問題である。

この重要な問題に対処するために、教区財政問題評議会は種々の検討を重ね、司牧評議会に審議案を提出した。

話し合い後、教区に「教会施設整備共済基金」設立検討委員会」を設置することが決定された。同委員会は9月定例会議で各県からの代表委員を承認してもらい、司教直任委員とともに今年10月から活動を始

める予定である。

(3) 戦後50周年を迎えて

佐藤司教は、戦後50周年を迎え司牧評議会が関連する行事について検討を始める意向を語った。これは、仙台・正義と平和協議会への回答でもある。(1ページ参照)

### 訃 報

ローラン・ジョリコール神父

4月4日大腸癌と全身への癌転移のためカナダで帰天。72歳。ケベック外国宣教会。49年司祭叙階、翌年来日。51年から青森県鮫町、浪打教会などで司牧。一時帰国後、69年仙台YBU文化センターを設立し、仙台聖書展、パチカン展など広報による宣教を活発に行なった。94年9月に病氣療養のためカナダに帰国した。

アウグスト・ゲーヴィレル神父

6月29日肺血栓塞栓症のため盛岡中央病院で帰天。花巻教会主任、77歳。ベトレム外宣教会。46年スイスで司祭叙階後、中国を経て48年来日。50年から盛岡・ドミニカン修道院担当、四ツ家教会主任、55年に花巻教会設立。長年の老人ホーム、病院訪問によって多くの人から慕われた。



### 司祭叙階

おめでとよう



好天に恵まれた5月4日、仙台教区に新司祭が誕生した。司祭に叙階されたのは北仙台教会出身の田中丈夫助祭である。

司教区センターでの叙階式には両親や親族、そして神学院時代に奉仕した教区内外の教会から多数の信徒が参列して、新司祭の門出を祝福した。

田中神父の司祭への歩みは、山形から仙台に働きに出たことがきっかけであった。同神父は仙台でJOCの活動をしているときに、神の呼びかけを初めて意識したという。それ以後、司教館に住み込んで神学院受験のため予備校に通うなど司祭への歩みが具体化した。



司祭たちの按手を受け、大勢の人に祝福された田中神父の司祭生活は、最初の派遣

先である仙台中央地区（元寺小路教会）です。すでに始まっている。

田中神父のことば

「自分のことを振り返ると、弱く、惨めな自分が思い返されます。しかしパウロは『世の無学な者、無力な者、無に等しい者、自分の卑しい者や見下げられている者を選ばれた』と言っているからそれはそれでよいのかもしれない。大切なことはキリストの愛によって燃やされ続けているかどうかなのでしょう。キリストによって燃やされていなければ私なんか何の役にもたないものとして残ってしまいそうです。ですからキリストの愛によって燃やし続けられなければならないのです。

司祭として、そのまゝにキリスト者として、エマオの旅人の心を燃やしたイエスの愛を私も欲しい、と思います。」

### ○助祭二名 誕生

司祭叙階式に先立つ4月12日の聖香油ミサの中で助祭叙階式が行なわれた。助祭叙階の恵みを受けたのは、東京カトリック神学院で勉学中の小松史朗、和野信彦の両名である。

二人は神学院生活最後の夏休みを、司祭叙階前の大切な時として司教館で過ごしている。

### 祝 司祭叙階記念

#### ○司祭叙階60周年

仙台教区の前教区長・小林有方司教は3月21日に司祭叙階60年を迎えた。

教区では小林司教を5月4日の司祭叙階式に招き、叙階60周年を祝うことにしていた。しかし、小林司教は叙階式前夜に、ホテルの部屋でころんで大腿骨を骨折して、入院せざるを得なかった。小林司教は各地からお祝いに駆けつけた人たちと会えず残念であった。

幸いに手術後の経過は順調で、同司教は5月27日に退院し、1月の阪神淡路大震災に際して、教区の信徒から心配してもらったことに感謝するとの言葉を残して、同日中に神戸の自宅に戻った。

#### ○司祭叙階50周年

八木山教会主任司祭、アチール・クルノイエ神父（ヘケベック外国宣教会）は6月29日に司祭叙階50周年を迎えた。

これを祝って八木山教会では6月18日に佐藤司教による感謝ミサと祝賀会を行なった。当日は同神父が司牧した青森県など各地から多数の信徒が出席した。

同教会ではクルノイエ神父の半生を記録した金祝記念誌「あしたも、きのうも、今日も」を発行して参列者に贈った。



仙 台 司 教 区 統 計 (1994. 1. 1~12. 31)



面 積 45, 970. 00Km<sup>2</sup> (青森・岩手・宮城・福島)  
 総人口 7, 321, 449人  
 信徒数 11, 984人 (滞日外国人は未算入)



		青 森	岩 手	宮 城	福 島	教区外	合 計
教 会		12	14	17	14		57
巡 回 教 会		2	2	3	4		11
集 会 所		3			1		4
信 徒 数	男	838	704	1, 589	1, 133	9	4, 273
	女	1, 544	1, 297	2, 973	1, 897		7, 711
	計	2, 382	2, 001	4, 562	3, 030	9	11, 984
秘 跡	洗礼(幼児)	16	30	25	24		95
	〃(成人)	17	14	57	27		115
	堅 信	11	31	22	10		74
	結婚 信徒同士	3		3	1		7
	信徒、他キリスト者						0
	信徒、他宗教者	16	16	23	17		72
	他宗教者同士	41	146	112	50		349
	男子修道院			1			1
	女子修道院	8	4	13	7		32

司祭不定住教会 (10)

五所川原  
 釜 石  
 千 厩  
 角 田  
 疊 屋  
 西 仙  
 亘 台  
 二 本  
 原 理  
 勿 松  
 来 町

共同司牧地区 3 仙台中央 (元寺小路、一本杉、疊屋丁、西仙台、東仙台)  
 宮城県南 (大河原、角田、白石、亘理)  
 会 津 (会津若松、喜多方、田島)

教区司教、司祭

司教 2 人  
 司祭 29 人  
 神学生 3 人

宣教会、修道会司祭

外国人司祭 34人  
 〃 神学生 3人

修道者

邦人修道士 2人  
 外国人 〃 2人  
 邦人修道女 276人  
 外国人 〃 29人  
 修練者等 3人

教会学校、要理、聖書研究

	男	女	計
幼児、小学生	291人	413人	704人
中学生	59人	78人	137人
高校生以上	105人	464人	569人

一般事業

センター・会館 4 29, 005人  
 学生寮 1 9人  
 音楽教室、他 2 2, 385人

教育事業

短期大学 3 1, 716 人  
 高等学校 8 6, 593 人  
 中学校 6 1, 460 人  
 小学校 8 2, 128 人  
 幼稚園 51 7, 746 人

社会事業

病院 1 132ベット  
 診療所 1 4, 900人  
 老人ホーム 5 299人  
 精薄児・者施設 3 92人  
 養護施設 5 310人  
 保育園 9 578人

## 戦後五十年を迎えて

## 私は赦しませぬ

あるシスターが残したもの

戦後五十年目にあたる今年、日本各地では関連する各種行事が展開されています。仙台教区内でも、キリスト教諸団体、その他の人たちが、単独に、あるいは共同で種の活動に取り組んでいます。

ここでは悲惨な戦争による憎しみや心身の痛みを乗り越えて、戦後の日本で神の愛を証した多くの人の中から一人のシスターを紹介します。

その人は戦争中に日本軍が占領して蹂躪したフィリピン共和国出身のシャルトル聖パウロ修道女会のシスター・マリ・フィロメヌ（本名デ・ロス・レイエス）です。彼女は一九四八年（昭和二十三年）に二八歳で大学院修士課程を修了後、ただちに来日して四七年のあいだ英語教師として働いた経歴の持ち主です。

シスターが日本に出発した時は、日本が侵略者として幾十万人ものフィリピン人を殺傷し、多くの女性を従軍慰安婦などに徴用して、苦しめ辱しめたといういまわしい行為の生々しい記憶が色濃くありました。また、また戦いによる廃虚と戦後の混乱によって、両国ともに復興の目戸も立たない時でした。

そのような中で敵国であった日本に行くことは、宣教のためとはいえフィリピンの人たちを驚かせる無謀ともいえる行動でした。実際、私たちは傷付けられた人間がどのような心を持つようになるかを想像してみると、理由がどうあれシスターの行動は理解しにくいものがあります。

しかしシスターは憎悪と恐怖の対象と考えられても当然な日本の子女のために、長年にわたって奉仕してくれました。

その働きについて、シスターに教えられ導かれた人たちは、授業では厳しかったが学生のためには最大限の心配りと努力を惜しまなかったと話しています。教職員には偏りのない公平な態度と、自分の意見を押しつけず、祈りのうちに人の意見を聞き入れるという寛大さを持っていました。

シスターと出会い、その心を知った人たちは、自分がシスターから受け入れられていることを感じ、ひいては神の愛が何んであるかを実感できたということを語っています。

多くの人のために働いた彼女の生涯で特別に忘れられないことがあります。

それは日本の戦争中の罪について、日本と日本人に一言として赦しを求め、非難することもなくその生涯を終えたということです。

戦争によって彼女も大きな痛手をこうむることがあったにも関わらず、日本の罪を

断罪しなかったことは私たちには驚くべきことです。

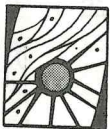
私たちはどうして彼女がそのように生きられたのかと問わずにはいられません。なぜならば、傷を受けた人はその相手を非難したり、裁こうとするのが人間の一般的な行動と考えられるからです。しかし、シスターにはそれがみられません。

彼女の研究室からはタイプライターの音が途切れる事がなく、時間は淡々と流れているばかりでした。彼女を訪ねた人は、彼女の周りにはある静かな時間を感じるばかりでした。

彼女はその生きる姿をとおして、主イエス・キリストによる神の赦しが私たちに与えられていることを教えています。己の命を捧げるほどに敵を愛し赦して、人間の罪を贖ったイエス・キリストの生き方、つまり十字架の神秘に彼女は生きたのでした。

それゆえに、彼女にとって人を赦すことはごく当たり前のことだったと知ることができます。そこには信仰者としての姿が浮かび上がるだけです。

彼女の穏やかな生活の中に、すべての人が神に祝福され、共に赦し合って生きることが人生の喜びであることが教えられています。私たちは彼女の生き方から、罪を告白し、隣人を赦し愛することの大切さを学びたいものです。



## ともに生きざるために

外国から日本に来て多くの人は、自分では解決困難な種々の問題を抱え、日本人の助けを願って生活している。

教区内にも外国人がたくさん生活しており、各種の援助活動グループが彼らのために活動している。その中から、90年に外国人の「衣(医)、食、住」など様々な人権侵害に対する権利救済活動を目的として、弁護士、医師、キリスト者、税理士、宅建主任者、通訳者、留学生、労働組合関係者によって発足した「みやぎ外国人問題研究会」の3分野の活動報告から、どのようなことが問題となっているか紹介します。

外国人が持っている問題を想像すると報告内容はそのほんの一部と考えられます。しかし、彼らが日本で生きるために苦勞していることを忘れてはならないでしょう。報告は93年、94年の2年分からです。

「みやぎ外国人ホットライン」では、電話によって結婚関連9件、生活関係8件、雇用問題6件、在留資格4件、その他8件で11か国の人から相談がありました。

「みやぎ外国人クリニック」では、病院紹介依頼9件、予防接種、各種検査関連6件、通訳依頼3件、その他10件で8か国の人々が相談し、また施設提供とスタッフが協力している仙台・錦町診療所には14か国の37名が訪ねて受診しています。

「東北ネットワーク」では、東北6県の10人の弁護士が東北在住外国人の相談に応じる体制を整えています。

## 一 一 情 報

### ○司教司祭共同墓石の祝別式

仙台カトリック鶴ヶ谷墓地にある司教墓地の整備事業が終わり、6月26日に教区司祭団による「司教司祭共同墓石」の祝別式が行なわれた。事業は土地の有効利用と司祭団の一致を表わすことを考慮して進められた。

当日は昨年10月に帰天した児山六七男神父の納骨式も行なわれた。

### ○大阪大司教区から救済金

阪神淡路大震災で大きな被害を受け、新生復興計画を推し進めている大阪大司教区から、3月13日に教区本部事務局宛に百万円が送金されてきた。

この送金について大阪大司教区では、今回の大震災で全国から救済を受けながら自らのことしか見ないで、昨年12月28日の三陸はるか沖地震やその他の災害による被災者に目を向けなかったことを反省し、被災者同志が互いに連帯したいとの意志表示であると話している。教区では感謝して救済金を受け取った。

## 世 界 版 案 内

### ●「紀元2000年の到来」

カトリック中央協議会  
教皇ヨハネ・パウロⅡ世は「第三の千年期」という新時代の到来を前に、昨年11月使徒的書簡を発表した。書簡の日本語訳が4月に完成、出版された。教皇は紀元2000年を大聖年として、「主に祝された日である聖年」を迎える準備を全教会に呼びかけている。定価700円。

### ●ビデオ「永遠の愛」

ロシア正教とイコンの世界  
音響映像グループメディアセンター  
定価5000円

## 編 集 後 記

暑い日が続く中、戦後に過ぎた50年の時の長さや重さが私たちに覆いかぶさってきます。今年、教区ではいつにも増して平和の尊さを、みんなでかみしめています▼人間の本当の幸せを願うとき、この世に平和が実現することを考えずにはいられません。一人ひとり大切にされ、希望と喜びに満たされた社会はいつ実現するのでしょうか▼平和を作る人は幸いの御言葉に励まされて、小さな歩みでも確実に歩み続けたいと思います。